

若手と課長、5人の薬系技官で リアルなホンネを語り合う

若手&課長 クロストーク

薬系技官を志したきっかけ

高江：今日は入省1年目、2年目の職員の皆さんに、集まっていただきました。私からいくつか聞いてみたいと思います。まず、皆さんが薬系技官を志したきっかけはどんなことだったのでしょうか？

黒崎：私は薬学部の実務実習を通して、薬剤師ができること、活躍できる場面はもっと増やせるはずと感じるところがありました。それまでは薬局などの薬剤師として働こうと思っていましたが、薬剤師ができることを増やすことに関わっていくために、直接制度的な部分に関わっていきたいと思い、薬系技官を志望しました。

牟田：黒崎さんと似ているのですが、私は4年制薬学部を卒業、修士課程に修了後、博士課程に進むこととなった際、「薬学部で何ができるのだろう」と考えるこ

とがありました。研究活動に取り組む中で他学部の人と話す機会もあり、せっかく薬学部に所属しているのであれば薬剤師についても勉強したいと思い、薬剤師免許を取得することを決めましたが、薬学部ならではの強みや、薬学部の教育と薬剤師の実務のつながりについて疑問に思う部分がありました。そのように、薬学部在学中に自分自身が感じた課題や疑問について、行政の立場から関わってみたいと思い、薬系技官を志望しました。教育関係で文科省とも迷いましたが、実際に薬剤師の実務をやる側にたって動いていきたいと考え、厚労省を志望しました。

上坊：私はインターンがきっかけでした。私は獣医学部に所属していたこともあり、実は、薬系技官ではなく獣医系技官のインターンに参加しました。ところがインターンの中で色々な部署の紹介を頂く中で、食品関係の業務をとっても、獣

医系より、薬系技官としての角度からの関わり方により興味があることがわかり、薬系技官に興味をもつようになりました。

高江：獣医系のインターンに参加して薬系に興味をもったんですね。

ちなみに皆さん薬系のインターンには参加されましたか？

全員：参加していないです。。(笑)

黒崎：インターンがあることさえ、入省するまで知らなかったです。

高江：他の職種でもインターンはやられているけど、そういった機会があることがあまり知られていないのかもしれないですね。インターンを通して気づくこと、分かることってありますよね。上坊さんは別職種のインターンに参加されたようですが、インターンに参加することで自分の興味のはっきりすることもありそう

自分自身が感じた課題や疑問について、行政の立場から関わってみたい



です。薬系に限らずですが、インターンがあることは、もっと多くの学生の皆さんに知ってもらえたら良いですね。

高江：きっかけについて、春田さんはどうでしょうか？

春田：私は薬系技官として入省する前に、社会人大学院に通いつつ薬剤師として現場で仕事をしていました。現場経験も一因ですが、大学院内での薬系技官経験者の方の聡明なお人柄を通じて薬系技官の仕事に興味をもつようになりました。このような方が従事する厚生労働省で働けば、自身の現実と理想の差分を絶えず意識し歩み続けられると思い入省を決めました。入省後の今、なりたい自分の正しい情報が手に入るという意味で、予見通り自分の理想像への近道だったと思っています。

高江：皆さん、バックグラウンドも色々で、志望のきっかけについても、やりたいたことがあって入られた方もいれば、働く人や業務内容を知りここで働くことをイメージされて入省された方もいるようで、様々ですね。ある意味、ダイバーシティがあるといえますね。きっかけは何であれ、皆さんが採用され、今ここで働いていただいていることが大事です。

就職活動・官庁訪問について

高江：今度は実際の就職活動の際の戦略的な部分についてきてみたいと思います。薬系技官の就職活動ではどんなことを意識されていましたか？どんな対策や準備をしていたかも、志望者の皆さん

が気になるところかと思います。

春田：官庁訪問では職員の方と話す機会がありますが、その中で受け答えはみられていると思います。私は、前提となる知識が全くなければなかなか面接を担当する相手からの話も引き出せないと思い、所管事項説明の資料などを読み、各課がどのような制度政策を扱っているか、また各種会議体でどのようなことが議論されているかについて予習していました。この予習が功を奏したのかは定かではありませんが、実際の官庁訪問では、職員の方に2〜3時間にもわたって熱くお話いただいたこともありました。入省してから様々な方と話をする機会がありますが、事前に議論の論点や相手方の情報をインプットしておくことは入省後にも通じる重要な姿勢だと思います。

高江：人は基本的に話すことが好きだと思いますし、当時の担当も自分の仕事について伝えて、分かってもらえたらよいと思っていたのではないかと思います。理解しながらも傾聴することが大切かもしれないですね。

牟田：私は特にこれといった準備はしませんでした。ただ、話を聞いて気になったところについて積極的に質問をしようというマインドで臨みました。その結果、職員の方にも気持ちよく話してもらえたのかなと思います。官庁訪問当日に聞く話の中で「そういう分野もあるんだ」という気づきを得るなど、新たに学ぶことも多かったです。日頃から授業や研究活動の機会も活かし、質問する習慣を付けておくのは大事なかなと思っています。

黒崎：私もこれといった事前準備はしませんでした。ただ、1つ自分の筋をもっておくことは大事かなと思っていました。自分なりに「こういうことをしたい」という思いをもち、それを軸に話せるように気をつけていました。

高江：自分の考えを持つことは大切ですね。ただ、厚生労働省の仕事については、面接をする職員の方が当然よく知っています。なので、意固地になりすぎず、相手の話を聞き柔軟に吸収する姿勢も大事だと思います。黒崎さんは、そここのバランスを自然にとっていたのですね。いずれにせよ、質問をするためにも相手の話をしっかり聞かないといけなし、自分の軸と合っているか判断するためにもまずは話を聞いて理解しないといけない。詰まるところ、相手の話をしっかり聞くことが基本だと思いますね。

上坊：私は薬学系のバックグラウンドではなかったため不安があり、新聞を読み単語だけでも知っている内容を増やすなど、自分なりに対策をしていました。また、面接練習もしていました。面接では素でいくことが大事だと言われていましたが、実際官庁訪問を経験して、本当にその通りだったと感じます。

高江：そうですね。面接ではぜひ、「素の」皆さんの姿をみせて欲しいです。実際に働くことになるのは、「素の」皆さんですから。緊張はしてしまうかもしれませんが、面接では、皆さんの緊張をほぐすためにアイスブレイクを入れるなど、工夫をしています。恐れずに、ありのままの自分の考えを話してもらえたらよいのだと思います。

また、自分自身が勉強して知った知識と、実際に制度づくりに関わった人の話は違うのは当たり前です。そこを謙虚に、自分はここまで勉強したのだけれど、実際どうなのですか？という形で聞き出せるとよいと思いますね。

黒崎：課長が、面接で一番よく見ているのはどのようなところでしょうか？

高江：やはり、人となりですね。結局のところ、知識はあとからでもつけられます。それよりも、人間性の部分、トータルバランスでどういう人なのだろう、というところを、色々お話をする中で見えています。それが、仕事をするうえで大切なところですから。

薬系技官に必要な力

黒崎：若手として聞いたみたい部分なのですが、課長が考える、薬系技官に必要な力はどのようなものでしょうか？

高江：薬系技官なので、薬を軸とした幅広い知識ですかね。そもそも、薬学自体が広がり大きい分野ですよ。今はいろいろ発展しているので、薬学以外の分野にわたる知識が求められる場面も多いと感じます。研究も、少しテーマや切り口が違うだけで全然わからないこと

だらけだと思います。自分自身の専門はきちんと持った上で、プラスアルファをどれだけ大きくできるかが鍵だと思います。そのためにも、色々な刺激を求めに行くと良いと思います。私が今いる医療機器審査管理課では、医療機器の見学ツアーなどの機会を設けていますが、特に若手には積極的に参加してもらいたいと思っています。仕事をしながらでもアンテナを高く持ち、知識を積極的に、貪欲にとりにいく姿勢が大事だと思います。産官学での議論の場も含め、この職場にはそういった貴重な機会があふれているので、ぜひ活用して新たな世界に触れ、経験を積んでいって欲しいですね。

黒崎：どうしても日々の仕事に必死で向けられていなかったのですが、今後のためにもそういった学びの機会を大事にしていきたい思いました。

高江：あとは、人との繋がりは大事ですね。ノウハウではなく、KNOW WHOともいえるでしょうか。わからないことがあったときに頼ることのできる、信頼できる人が各分野にいれば、何かあったときに助けてもらえることがあります。またその人から新たに人を紹介いただくなど、KNOW WHOをたどっていけば、大体のことは解決すると感じています。先ほどの話と重なりますが、何か自分の得意分野をもったうえで、そ

の知識を活かしつつ、人との繋がりををもって守備範囲を更に広げていくことが薬系技官に必要な力だと思いますし、それができると仕事楽しくできるのではないかと思います。幸いにも、色々な人と話すことのできる仕事ですので、仕事を通じた人との繋がりを、私は大事にしています。

仕事での苦労、大変だと感じること

高江：皆さん、実際に働いてみてどうでしょうか。若手職員の皆さんが日々働く上で大変だと感じること、苦労などがありますか？

自分のやりたいような指示がこないとか、同僚とコミュニケーションがとれない、上司に声かけづらいなど、色々あるのではないかと思います。

上坊：1年目ではありますが、異なる立場の人との調整や交渉の機会があり、その際自分の意見をどう相手に伝えていくかがなかなか難しいと感じます。

高江：まずは自分の意見をわかってもらうことより、相手が何をしたいのか、どういう背景からこういう考えをもつのか、ということを理解するように努めています。その前提で会話をすると、

知識を積極的に、貪欲にとりにいく姿勢が大事



令和6年入省。インターンシップをきっかけに薬系技官としての入省を決めた。医療機器審査管理課に配属され、医療機器・体外診断用医薬品・再生医療等製品の審査に関わる業務を担当している。ラグビー観戦が趣味のため、冬になると活動的になる。



令和5年入省。実習をきっかけに、薬剤師による研究など、薬剤師のあり方を考えるうちに、薬系技官の仕事に興味をもち、入省を決めた。医薬局総務課に配属され、薬局・薬剤師、医薬品の販売に関する業務を主に行っている。最近は、オフにランニングで遠くまで旅をしている。

様々な経験をされた方と一緒に仕事ができることは厚生労働省の仕事の醍醐味

相手も自分もカチンとこないと思います(笑)。相手の状況を理解したうえで、こちら側の譲れないポイントについて主張をしていくことがポイントですね。なかなか折り合いのつかないこともあり一筋縄に行かないこともありですが、そうすると双方の理解が得られやすいコミュニケーションに繋がると思います。

高江：ほかの皆さんはどうでしょうか？

春田：自分の仕事もうまくいったのかそうでないのか、判断できないときがあります。成功したのかどうかは掴みづらく、次に活かせないことがあります。

高江：上司の中にもそういったフィードバックを積極的にしてくれるひともいるけれどそうでない人もいますので、相談できる上司をみつけるといいかもしれません。そういうときは周囲に頼りながら乗り越えていくしかないですね。後になれば、良い経験だったと振り返ることができることもあります。

すが、皆さんにもつながりを大事にして欲しいですね。

春田：高江課長のこれまでのご経験の中で、特に大変な思いをされたご経験などはございますか。

高江：大分前の話になりますが、着任まもなく着任先の案件で事件が起こり、騒動の対応に追われたり、省内の方から叱責を受けたりすることがありました。着任直後で何も分からない中で各所への説明対応が求められるなど、かなり大変だった記憶があります。今は昔よりワークライフバランスも重要視していますし、周囲の人の接し方も変わってきていますからね。でも昔はそんなこともありましたが。役所での仕事では、責任が重い分、何かが起こった際には急な対応を要する場面もあるかもしれません。そういうときは周囲に頼りながら乗り越えていくしかないですね。後になれば、良い経験だったと振り返ることができることもあります。

おわりに

牟田：高江課長にとって、厚労省で働くことの楽しさ、醍醐味はなんでしょうか。

高江：厚労省には、薬系技官以外にも、様々な職種の方がいて、バックグラウンドによって考えも様々です。特に医薬局は薬系が多いですが、研究をとりまとめる厚生科学課というところには医系技官はじめ技官の全職種がいて、事務官にも様々な部署での経験を積まれた方がいます。役所ではダイバーシティが大事ですし、様々な経験をされた方と一緒に仕事ができることは刺激的であり、厚生労働省の仕事の醍醐味でもあると思います。そのなかで自分の考えの傾向や狭さなどに気づくこともありますし、自分の知識を共有することで役に立てると感じる事もあります。

薬系技官を目指す方へのメッセージ

薬系技官に少しでも興味を持っていた だけたでしょうか？ 薬系技官の業務は多岐にわたり、どんなバックグラウンドの人でも活躍できます！是非一度説明会にお越しください！「生きる」を支える、そんな仕事を一緒にしてみませんか？



令和6年入省。薬剤師の実務実習をきっかけに、薬事行政に興味を持ち、入省を決めた。医薬局総務課の企画法令係に配属され、局内外の調整を主な業務として行っている。最近はデスクに置く小物探しにはまっている。



令和5年入省。大学では薬学を専攻し、公衆衛生系の大学院での経験をきっかけに厚生労働行政に興味を抱き入省を決めた。入省時は消費者庁食品衛生基準審査課(旧厚生労働省食品基準審査課)に配属され、専ら食品中の汚染物質の基準策定業務を担当している。最近はラーメンのハシゴが難しくなっている。